

第6回「泉大津市オリウム随筆賞」

【優秀賞】

一夜かぎりのパジャマ

楓まさみ・大阪府

私の携帯電話のデータの中に、数枚のパジャマ姿の母の写真があります。

母の最後の写真になってしまったのですが、そこにはレンズを前にしても、もうほほえむ気力もなく、ベッドの手すりを支えに、かろうじて腰を浮かせている母がいます。面やつれた母を見るのは今でもつらいのですが、着ているパジャマに視線を移すと、それでも母はしあわせだったのだと、少し心が軽くなるのです。

母は昨年十一月に、九十三歳で天寿を全うしました。

母はとてもおしゃれな人でした。そしてそのおしゃれ心は、亡くなる寸前まで失われることはありませんでした。

九十三歳になっても、よほど体調が悪くない限り、ほぼ毎朝お化粧をしていました。ベッドに横たわることが多くなっても、薄化粧をし、髪を整え、着替えも毎日自分でしていました。

わたしは、それを単に母の身だしなみだと思っていたのですが、母が亡くなる少し前、「ママはお化粧して、いつもきれいにしてや」と、父から言われたと明したのです。

父はもう三十数年も前に亡くなっているのですが、母はその父の言葉をずっと守り続けてきたのです。母にとつては唯一の、父につながる大切な約束だったのでしよう。いかにも堅物といった父のイメージからは、とても考えられない言葉ですが、その時の状況を想像してみると、なんだかほほえましくて、自然とほほがゆるんでくるのです。

母が亡くなる二ヶ月ほど前のことです。

お見舞にやって来た三人の娘達が、

「ばあちゃん、敬老の日のプレゼントやけど、何がいい？」

と、母に尋ねました。

いつもなら、「そんなん、ええよ」と言っていた母が、いつになくその時は、

「せやねえ、パジャマがいいわ。トロンとした生地で、楽なのがいいねえ」

と、リクエストしたのです。

「ばあちゃんは、おしゃれやからむずかしいけど、探してみるね」

娘達は、母とそんな会話をして、その日は帰っていきました。

それから三人の娘達は、それぞれ、ネットで調べたり、ショッピングの折には、パジャマの売り場を見に行ったりしたようです。メールが送られてきて、母に見せたりもしたのですが、中々、これはというのが見つからないまま、敬老の日も過ぎてしまいました。

母は気をつかって、

「私がおままた言つて悪いことしたねえ。三人の気持ちは受け取ったから、もういいよ」と、言い始めました。

それでも、十月も終りに近づいた頃、遅ればせながら、娘達が敬老の日のプレゼントを持って、お見舞にやって来ました。

それは、母好みの青と紫を基調としたペーゼリー柄で、トロンとした素材が見るからに楽しそうなパジャマでした。

「こんなええのんもろて、しあわせ、しあわせ。ありがとねえ」

母はとても喜んだのですが、その場で娘達に、着て見せる気力はありませんでした。

次の日も、着替えることができませんでしたが、その次の日、夜になって、母がパジャマを着替えると言い出しました。

なんとか着替えをすませると、母は、「楽やわー」と喜んで、

「棺桶に入る時は、これを着せてね」

と、言ったりもしました。

私は、母になんとか少しだけ腰を浮かせてもらって、写真を撮り、娘達それぞれの携帯電話話に送りました。

その時の写真が、私の携帯電話に残っている母の写真なのです。

次の日の朝のことです。母の容体が急変して、救急車で入院することになったのは。

病院では病院の寝間着を着たので、結局、そのパジャマを着ることができたのは一晩だけでしたが、たとえ一晩でも、母が着た姿を見ることができてよかったです、後になってつくづく思いました。

入院して一週間後、

「ありがとう。悔いのない、しあわせな人生やったわ」

と、最期の言葉を残して、母は逝きました。

母が望んだように、娘達のプレゼントのパジャマを一番下に、その上に白装束、母が選んでいた着物も着せてもらって、納棺することができました。娘達に最後の化粧をしてもらった母は、元気だった頃のふつくらとしたやさしい面立ちに戻り、孫達のぬくもりに包まれて旅立っていきました。

「パパ、約束守ったよ」

母の声が聞えます。